

草地のギシギシ対策について

宗谷農業改良普及センター宗谷北部支所 令和7年8月作成

はじめに

草地更新をしても、ギシギシが目立つ草地が見られます。ギシギシには選択性の除草剤が利用できますので、早めの防除で良好な植生を維持しましょう。

ギシギシの特徴

- ①シュウ酸、タンニンを含み、家畜の嗜好性が悪い。
- ②地上部を刈り取っても再生力が強く、種子をつける。種子量は1株あたり数千から十万粒程度と多い。
- ③地中に埋没した種子は休眠し、長期にわたり生存する。
- ④経年草地ではギシギシを防除しても、裸地から実生が生育し、元の状態に戻りやすい。

ギシギシに使用できる除草剤の種類と特徴

更新後間もない草地はギシギシの株がまだ小さいため、早めの除草剤処理で裸地化を防ぐことができます。下記の除草剤の特徴を踏まえ、適正に利用しましょう。

商品名	使用時期	10a当たりの使用量	使用回数	注意事項
アージラン液剤	・秋処理 ・ギシギシ類の栄養成長期(但し、最終採草後)	新播草地 200~300ml 経年草地 300~400ml	1	・新播草地において夏・秋播種草地への散布は避ける。 ・当年はギシギシ類の黄化のみで翌年春に枯死する。 ・秋散布は最終番草後に行う。 ・散布後14日間は放牧を行わない。
ハーモニー75DF水和剤	・夏処理および秋処理 ・夏播種牧草定着後 ・ギシギシ類の草丈20cm以下	新播草地 0.5~1.0g(散布水量100L)	1	・クローバに対する薬害が著しい。なお、新播草地でのアルファルファ(主体・混播)草地における試験例はない。 ・経年草地はイネ科単播経年草地及びアルファルファとの混播草地が対象。 ・ギシギシ類の葉が展開してから行う。 ・散布後21日間は採草及び放牧を行わない。 ・使用後できるだけ早く専用の洗剤等で洗浄する。 経年草地の夏処理についてはイネ科牧草についても生育抑制が見られることがあるが、夏期高温時の薬害の程度はアージラン液剤に比べ少ない。
	・夏処理及び秋処理(採草21日前まで)	経年草地 3g	1	
バンベルD液剤	・秋処理 ・ギシギシ類の栄養成長期 ・秋期最終刈取後30日以内	経年草地 75~100ml(散布水量100L)	1	・マメ科牧草には薬害が生じるので、イネ科草地で使用する。 ・秋期散布した牧草は利用しないこと。

除草剤の散布について

近年はドローンによる散布も見られますが、ギシギシに対する除草剤はドローンの適用外です。したがって、スプレーヤによる散布になります（写真1）。

ギシギシ対策以外にも草地更新時の地下茎型イネ科雑草処理などに使用するため、宗谷管内でもスプレーヤを所有している農業者が散見されます。



写真1 除草剤散布の様子

所有している農業者の声

「毎年ギシギシの防除で利用している。20年ほど前に購入したものが、壊れないし自分のタイミングで散布できるので未だに活用している。メンテナンスの注意点は冬期に不凍液を入れておくこと」

除草剤を散布したギシギシの推移 (夏処理の例)

稚内市でR6年秋に更新した草地の事例です（写真2）。この草地では作業の立て込みにより除草剤が散布できなかった経緯があります。

農業者からは「ここまでギシギシが増えるとは思わなかった」との声が聞かれました。

この草地では、R7年7月7日にハーモニーDF75水和剤を散布しました。その結果、3週間程度でギシギシはほぼ枯死しました（写真3）。しかし、ギシギシの個体数が多く裸地が広がったため、今後は追播を実施する予定です。



写真2 除草剤散布前の草地の状態

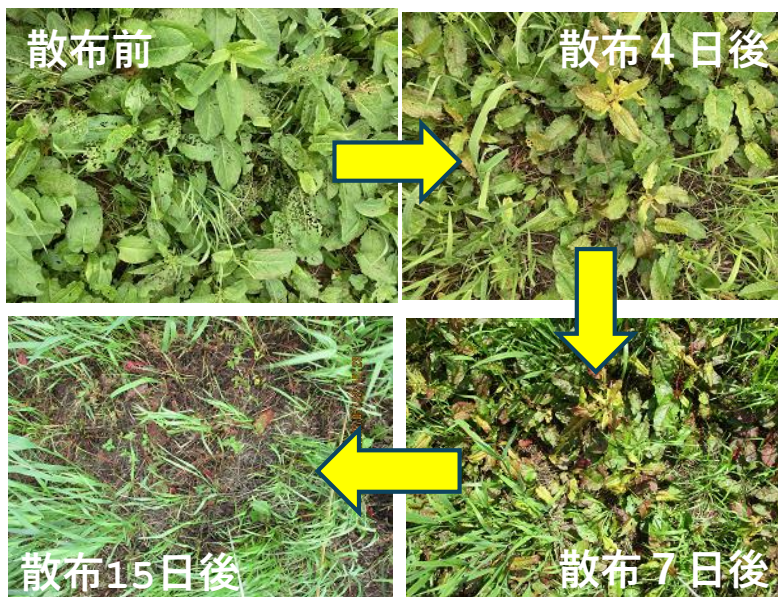


写真3 除草剤を散布したギシギシの推移

- ①除草剤を使用せずに（できずに）更新した草地は、こまめに状況を確認し、ギシギシが確認された場合は、早めの対処を考えましょう。
- ②既にギシギシが目立つ草地は、二番草収穫後に秋処理を検討しましょう。